

実のところ、ずいぶん長い間、私は新聞  
や雑誌を講入してはいない。親許に暮らしてい  
たころは、暇つぶしに父親の部屋に行、て週  
刊誌をぱらぱらやったり、新聞のスポーツ欄  
を読んだりしていた。しかし、東京でひとり  
で暮らすよりにな、た今では、それらをいち  
いち講入するお金の余裕もなく、かと言って  
コンビニ等で立ち読みするのも何とばかりに  
な、ともなく感じ、結局、手を取、て読む速  
報タイプのメディアからは遠ざかってしまっ  
た。最近、世の中の流れはインターネットの  
新聞で手早く読めるし、スポーツニッスは  
その専門のサイトで済ませてしまっている。  
『インターネットがあるからもう新聞や雑誌  
はいらない』と言う人があれば、自分の生活  
と照らしあわせてみても、なるほどそうかも  
知れないなと思う。

しかし、ある種の雑誌には生き残ってほし  
いと私は思っている。私の枕元には『世界の  
七犬遺跡』というタイトルの巨大な写真集が

ある。眠れぬ夜に私はゴソッと起きだしてこ  
の写真集を眺める。私は、指の間に写真の印  
刷された紙をおさめながら、それをゆくり  
と、時にははやくはやくにめくっていく感  
覚がとてもの好きである。これはパソコンでは  
とてもの味ありとはできない。パソコンの場  
合、指にふれるのはマウスであり、スクリー  
ンであり、決して画像そのものではないから  
である。だから私は、写真を主として扱う雑  
誌には生き残ってほしいと思う。

写真の雑誌は、不思議な「重さ」を持て  
いるものだ。憧れの遠手の写真であるとか、  
遠い町の生活の風景であるとか、そっくりも  
のが、紙の束以上の重さをつくりあげてい  
るのだと思う。しかし、うちのパソコンでい  
くら写真を見ても、それに似た重さを感じられ  
ない。それよりも、情報が「重」くて、画面  
上に表示されるのにえらく時間がかかる。不  
快な重さである。やっぱり今夜も私は『世界  
の七犬遺跡』を枕に眠りにつくだろう。